（城西人文研究第17巻第2号）

【翻　訳】

ディオニュソス酔歌

フリードリッヒ　ニーチェ
河　内　信　弘訳

目　次

たかが道化さ　たかが詩人さ　(2)
砂漠の娘たちにまじって　(8)
最後の意志　(18)
猛禽のあいだで　(20)
焔の合図　(26)
日は沈む　(28)
アリアドネの嘆き　(31)
名声と永遠　(38)
最も豊かなる者の貧しさについて　(44)
訳者あとがき　(52)

たかが道化さ　たかが詩人さ

明るさもうせたそとで、
はやくも夜露のなぐさめが
姿もなく、音もなく
――あらゆるなぐさめの優しさのように
なぐさめの夜露は柔らかい靴をはき――
地上におりてくるとき、
想い出せるか、おまえは、熱い心よ、おまえは想い出せるか、
あのころどれほど渇ききっていたかを、
天上の涙と露のしずくに飢え
じりじりとしかも疲れながら渇ききっていたかを、
そのとき黄色の草の小道で
意地悪気に夕日のまなざしが
黒い木立をぬけて、おまえの回りを駆けめぐっていたものだ
目も眩らむ太陽の燃えるまなざしが、いい気味だと。

「真理の求婚者だと――おまえが」そいつはそう嘲笑ったものだ

いいや、たかが詩人さ。
一匹の獣、狡がしこく、獰猛で、忍び歩く獣、
嘘をつかなければならない、
意識して、百も承知で嘘をつかなければならない、
獲物がほしくてほしくて、
いろいろの仮面をかぶり、
自分を仮面とし、
自分を獲物とするほかない一匹の獣、
これが——真理の求婚者だと・・・
たかが道化さ。たかが詩人さ。
色とりどりのことをただ喋りながら、
道化の仮面の裏から色とりどりに喋り散らしながら、
でまかせの言葉の橋をあちらこちらと
見せかけの天から天に懸る
嘘の虹の橋を
あちらこちらと迷い、あちらこちらと忍んで——
たかが道化さ、たかが詩人さ・・・
これが——真理の求婚者だと・・・

黙って、かたく、なめらかで、冷やかな、
彫像にもならなかった、
神殿の柱として刻まれることもなかった、
神を護る者として、
神殿の前におかれることもなかった。
いいや、このような道徳の立像に敵するものとなって、
神殿のなかより荒野のなかが心地よく、
猫のあの勝手気ままにまかせ
どんな窓でも飛びこえ
ひょいとどんな偶然にも身をすべりこませ、
原生林ならどこでも嗅ぎよって、
おまえは原生林のなかで
斑の毛深い肉食の猛獣にまじって
罪深い健康と美しさと斑もあざやかに走りまわり、
唇に淫乱をただよわせ、
冷笑のよろこびに、地獄のよろこびに、血に飢えるよろこびに、
襲いかかり、忍びより、虚言を弄して駆けまわる・・・
あるいは鷲のように、それはいつまでも、

いつまでも幾すじの谷を、
おのれの深淵をのぞきこみ・・・
――ああ、地はここでつき、谷は、
はじまり なかへ、
深みへとしだいに渦をまいて落ちてゆく――
やがて、
とつぜん、
まっすぐに下降し
一閃
小羊の群を襲い、
不意をつき、飢にほてりながら、
小羊に涎れをながす、
ありとあらゆる小羊の魂に恨みを抱き、
小羊にあたえる乳の優しさをもつ
徳にみちた、羊のような、縮れ毛の、愚かな、
まなざしをしたすべてに憤怒の恨みをこめて・・・

このように
鷲のようなものさ、豹のようなものさ

詩人の憧れとは、
無数の仮面の裏にひそめたおまえの憧れとは、
なんじ道化よ、なんじ詩人よ・・・

そのおまえは人間を
神とも羊とも見たのだ――
人間のなかの神を八つ裂きにし
人間のなかの羊を八つ裂きにし
そして引き裂きながら笑う――

それが、それがおまえの幸せというわけだ、
豹であり鷲でもあるものの幸せ、
詩人であって道化でもあるものの幸せ・・・

明るさもうせたそとで、
はやくも三ヶ月の鎌の刃が
深紅のほてりのなかを蒼ざめて
妬ましそうに忍んでゆくとき、
――昼に敵意を抱き、

一足ごとにひそやかに
空にぶらさがったバラの野を
刈りとってゆく、ついには、
バラの野は夜へ青ざめて沈んでいく、
このようにわたし自身もその昔、
わたしの真理への狂気から、
わたしの昼への憧れから、
昼に疲れ、光に病んで沈んでいったものだった、
——深みへ、夜へ、影へと、
ひとつの真理に
焼かれて、渇き、沈んでいったものだった、
——まだ想い出せるか、おまえは、熱い心よ、おまえは想い出せるか、
あのころどれほど渇ききっていたかを——
あらゆる真理から
わたしが追放されていたならばと思っていたことを。
たかが道化さ。たかが詩人さ。

砂漠の娘たちにまじって

一

「いかないでいただきたい」と漂泊の男は言った。その男は自分をツァラトゥストラの影と称していた。「わたしたちのもとにいていただきたい。さもなければ、あの昔ながらの鈍い哀しみがわたしたちに襲いかかってまいりましょう。

はやくもあの老魔術師はそのもっとも悪しきものを振舞っているではありませんか。さあ、御覧ください、あの善良で敬虔な法王さまは涙にくれ、またしても憂鬱の海へとのり出していかれる。

あそこにおられる王様たちはわたしたちの前ではまだ良いお顔をしておられることでしょう。が、しかし、誰も見ていなければ、賭けても結構です、御自分達で碌でもないお芝居をはじめることでしょう。

――つまらないお芝居を、流れゆく雲の、湿って憂鬱の、雲のたれこめた空の、盗まれた太陽の、吼える秋風のお芝居を、

――わたしたちの遠吼えと助けを求める碌でもないお芝居。わたしたちのもとにいていただきたい、ツァラトゥストラ。ここにはたくさんの隠された悲惨があるではありませんか。それは話したがっております。それに、たくさんの夕べが、たくさんの雲が、たくさんの黴くさい空気がただよっております。

あなたは滋味ゆたかな男子の食事と力強い箴言とでわたしたちを養ってこられた。その仕上げのデザートに、またしても軟弱な女の霊たちが襲ってくるにまかせてはなりますまい。

あなただけがそのまわりの空気を強壮にし、澄んだものにするのです。あなたの洞窟のあなたのもとより空気の良かったところを今までこの地上でわたしは見い出したことがあったでしょうか。

さまざまの国を見、わたしの鼻はさまざまの空気をためし、品定めをしてまいりました。しかし、あなたのもとでわたしの鼻孔は最上の快楽を味っております。

ただし――ただし――ああ、むかしの思い出を許していただきたい。かつてわたしが砂漠の娘達にかこまれながら作ったむかしの食後の歌を。

というのも砂漠の娘達のもとには、ことおなじ気持のよい、明るい、東方の国の空気があったのです。雲におおわれた、湿った、憂鬱の古きヨーロッパから、そこは遠くへだたっておりました。

その頃、このような東方の国の娘達をわたしは愛し、雲ひとつ、思想ひとつかかることのない、そことはちがった青い天界を愛していたのです。

あなたがたには信んじてもらえないだろうが、娘達は踊っていないとき、その坐った姿はなんと可愛らしいものであったか、深遠にしてしかも思想もなく、小さな秘密のように、リボンのかけられた謎のように、デザートの胡桃のように――

いろとりどりに異国の素晴らしさ、でも、雲ひとつない。解かれるままに身をまかせる謎。このような娘たちへのいとしさに、その頃、食後の讃美の歌をひとひねりしたのです。」

ツァラトゥストラの影と称する漂泊の男はそう言った。誰かがそれに応えるまえに、すでに早くも老魔術師の竪琴をとって、脚を組み、落着いて、思慮深げに、ぐるりとあたりを見まわした。――が、鼻孔でゆっくり、問いたげに、新らしい国の新しい空気をたしかめるように、息を吸い込んだ。ようやく、男は吼えるに似た声で歌いはじめた。

二

砂漠は成長する。災いあれ、砂漠を宿す者に・・・

三

ああ。
いかめしいぞ。
威厳にみちた始りだ。
アフリカ的にいかめしく。
ライオンにふさわしく
それとも、道徳を説いてうるさい吼え猿にふさわしくか・・・
――だが、きみたちにはかかわりのないこと、
きみたちはなんて可愛いのだ、
その足もとに、わたしが
このヨーロッパの男がひとり、椰子の葉かげに、
坐ることが許されている。セラ。

まさに奇蹟というもの。
わたしは坐っている、
砂漠にちかく、今ここに
すでに今また砂漠を遠くはなれて、
そのうえ乱れることもなく。
言ってみればこのささやかなオアシスに
飲みこまれてしまったわけだ
――オアシスはちょうど欠伸をしながら
その可愛らしい口をあけたところ
口という口のなかでもっとも匂のいいものを
そこへわたしは落ちて
沈んで貫ぬいて――君たちのなかへ、
きみたちはなんて可愛いのだ。セラ。

幸いあれ、幸いよ。例の鯨に、
ただし、あの鯨がお客をこのように
悦しませてあげたならばの話――きみたちは分るだろう、
わたしの学のある仄めかし方が・・・
幸いあれ、あの鯨に、

鯨の腹がこのように可愛いオアシスの腹であったなら、
しかし、わたしからみたら怪しいもの。
だからわたしはヨーロッパから来たのさ、
そいつはどんな妻君より疑り深いときている。
神よ、よくあらためたまえ。
アーメン。

ここに今わたしは坐っている、
この小さな小さなオアシスで、
椰子の実のように、
とびいろに、芯まで甘く、金色の果汁をふくみ、
若い娘のまるい口を求めて
いやそれにもまして若い娘の
氷の冷たさの、雪の白さの、鋭い
歯に咬んでもらいたく、つまりは
火照る椰子の実の心はそんな歯をもとめてあえぐのさ。セラ。

南の国のこの果実に
果実に似て、あまりによく似て

わたしはここに横になり、小さな
羽虫が
まとわり舞い、まとわり遊ぶ、
おまけにもっと小さな
もっと愚かな、もっと性悪な
望みやきまぐれまでが、——
ドゥドゥそしてズライカ
若い牝猫
なにも言わないが、心を見透かす
きみたちにかこまれながら
——一言に多くの感情を封じこめるなら、
スフィンクスにかこまれながら
（神よ、許したまえ
このわが言葉の罪を・・・）
——ここに坐り、最上の空気をかいでいる、
まことのパラダイスの空気を、
光かがやく軽い、金色の縞の空気を
そんな空気は、その昔にだけ
月から落ちて来たそうだ、

たまたまか
いにしえの詩人のうたうがごとく
羽目をはずしておちてきたのか
疑り深いわたしにすればこれも怪しいけれど、
だから来たのさ
ヨーロッパを逃れて、
そこは結婚したどんな女より疑り深いのだ。
神よ、よくあらためたまえ。
アーメン。

このうえない素晴らしい空気を吸いながら、
鼻を杯のようにふくらませ、
未来もなく、思い出もなく、
こうしてわたしはここに坐り、
きみたちはなんて可愛いのだ、
椰子の木をみつめる、
椰子の木は踊子のように、
身をかがめ、しなだれ、腰をふる
——じっと見ていると、体がいっしょに動いてしまう・・・

踊子とおなじように、そう思えるのだが、
すでに随分ながく、危険なほどながく
いつまでもいつまでも片一方の脚で立っていたのではないか。
――そうしながら、そう思えるのだが、忘れてしまったのだろうか、
もう片一方の脚を。
せめて行方しれない双子の
宝石の片われをと
さがしてみたがむだだった、
――つまりもう片一方の脚を――
彼女の愛らしい、愛らしすぎる
扇の、うつり気の、きらきらと飾りのついたスカートの
犯してはならないあの近くで。
きみたちが、きみたちは美しいな、
わたしを信じてくれるなら、
椰子の彼女は脚をなくしてしまったのさ・・・
うっ、うっ、うっ、うっ、うっ・・・
なくなってしまった、
永遠になくなってしまった、
あの片脚は。

ああ、気の毒に、あの愛すべき片脚は。
どこだろうか――あるかもしれない、見捨てられ哀しんでいるかもしれない、
あの孤独の片脚は。
ことによったら震えているかもしれない
獰猛で、黄色の、金色のたてがみの
獅子という怪獣のまえで、あるいはもう
噛み切られ、喰い散らされて――
可哀いそうに、おう、おう、喰い散らされてしまったか。セラ。

ああ　泣いてくれるな、
やさしい心たち。
泣いてくれるな、きみたち
椰子の心よ。ふくよかな胸よ。
甘い言葉をささやく心臓の
可愛いい小袋よ。
雄々しくあれ、ズライカ。勇気だ。勇気。
もう泣くな、
蒼い顔したドウドウよ。
――それともなにか強壮剤、強心剤が

この場にはふさわしいのか、
聖油をそそがれ権威づけられた箴言か
いかめしいお説教かな・・・
ふん。
出てこい、威厳よ。
鳴らせ、鳴らせ、もう一度、
徳のふいごとを。
ふん。
もう一度唸れ、
徳をたたえて唸るがいいさ、
砂漠の娘たちの前で道徳の獅子として唸るがいい。
——なぜかと言えば、徳の遠吠えこそが、
きみたちはなんて可愛いいのだ、
ヨーロッパの情熱、ヨーロッパの火照る飢えなのさ、
飢えそのものなのさ。
そしてわたしはここに早くも立っている
ヨーロッパ人として、
ほかにありようがないのだ。神よ、われを助けたまえ。
アーメン。

＊　＊
＊

砂漠は成長する。災いあれ、砂漠を宿す者に。
石は石にあたってぎしぎし鳴り、砂漠はからみつき、呑みくだす。
巨大な死はまっ赤に燃えながら褐色の目でみつめ、
噛み砕く、――死のいのちは噛み砕くこと・・・

忘れるな、快楽によって浄化された人間よ、
おまえは――石であること、砂漠であること、死であることを・・・

＊　＊
＊

最後の意志

あのように死ぬこと、
かつて見た死におもむく友のように――、
稲妻のようなまなざしを友は

神のようにわたしの暗い青春に放ったものだった。
自由奔放でしかも深く、
戦いのなかで軽ろやかに舞い――、

戦う者たちのなかでもっとも朗らかな、
勝った者たちのなかでもっとも哀しめる者、
自分自身の運命の上に立つひとつの運命、
厳しく過去を思い、未来を思う――。

勝利をえたがゆえに震えつつ
死におもむきつつ勝利をえたことを喜び――、

死におもむくあいだも命令を下し
――ことごとく滅ぼせと友は命じたのであった・・・

あのように死ぬこと、
かつて見た死におもむく友のように、
勝利をえつつ、ことごとく滅ぼしながら。・・・

猛禽のあいだで

ここで下りようとするなら、
あっというまに
深淵は人を呑みこむ。
――しかし、ツァラトゥストラよ、おまえは
この断崖をいまもなお愛し、
樅の木のごとくあろうとするのか。――

樅の木が根を張るここでは
岩さえもおののき震え
深みを見おろしている――
ことごとくあたりのものが
落下を望む、断崖で
樅の木はためらう、
荒々しい斜面、落ちてゆく川
その苛立たしさのなかで

辛抱づよく忍び、厳しく、黙し、
孤独に・・・

孤独に。
ここで誰が客に、
誰がおまえの客に、
なろうとする者があろうか・・・

猛禽ならばいざしらず、
猛禽はおそらくのこと
じっと耐える樅の木の
髪に、ひとの不幸を楽しみ、とまるかもしれぬ、
狂喜の笑いを、
猛禽の笑いを響かせながら・・・

なんのためにそのように耐えるのか、
——鳥は冷酷に嘲笑う、
深淵を愛するならば、翼を持たなくてはならぬ・・・
ひっかかっているだけでは意味がない、

宙づりのおまえのように――

ああ、ツァラトゥストラ、
残酷きわまりなきニムロト。
ついこのあいだまでは神の狩人、
あらゆる徳を捕える網、
悪の矢。
いまは――
おまえ自身に追われ、
おまえそのものの獲物、
おまえ自身が射ぬかれて・・・

いまは――
おまえとの孤独、
自分の知のなかでの二重の孤独、
無数の鏡にかこまれ
おまえ自身の前で誤りを犯す、
無数の想い出にかこまれ
あてどなく、

傷という傷に疲れきり、
霜という霜にこごえ、
自分の縄で首をしめられる、
おのれを知る者。
おのれの首をくくる者。

おまえは自分を
その賢さでなぜくくってしまったのか
昔なじみの蛇の楽園におまえは
なぜ誘いこまれてしまったのか
おまえのなかに
なぜ忍びこんでしまったのか——おまえのなかに・・・

蛇の毒に苦しむ、
いまは病いの身、
最も苛酷な運命を引き当てた、
いまは囚われの身、
自分の穴のなかで
身をこごめて働き、

自分の穴からでることもできず、
自分を掘ってゆく、
役立たたずの、
硬直した、
屍――、
無数の荷を塔のように背負わされ、
自分を背負いこむ、
知る者、
おのれを知る者、
賢明なるツァラトゥストラ・・・

おまえは最も重い荷をさがしもとめ、
そこでおまえを見い出したのであった――、
おまえを投げ捨てるわけにもいくまい・・・

待ち伏せ、
うずくまり、
もう真っすぐに身を起すことが出来なくなった男。
おまえは墓とからみあいながら成長してきたかに見える、

奇形の精神・・・

ついこのあいだまで自忽れの竹馬に乗り、
気取って自忽れていたもの。
ついこのあいだまで神なき隠者、
悪魔とつれだつ隠者、
あらゆる高慢不遜の緋色をまとった貴公子・・・

いまは――
虚無と虚無のあいだで
身をくぐめる、
疑問符、
疲れきった謎――
猛禽にとっての謎・・・

猛禽どもはかならずおまえを「解く」であろう、
すでに「解くこと」に渇望し、
はやくもおまえのまわりを、猛禽の謎のまわりをはばたいている。
おまえのまわりを、宙にくくられた者のまわりを・・・

ああ、ツァラトゥストラ・・・
おのれを知る者・・・
おのれをくくる者・・・

焔の合図

海のなかに島の成長したここに、
生贄をささげる祭壇の石の築かれて、きりたつところ
黒々とした天のしたのここに、
ツァラトゥストラは火の手をあげる、
漂流する舟人たちには救いの焔を、
答えを持つ人々には疑問のしるしを・・・

灰白色の腹をくねらせる焔
——焔の欲望は冷ややかな遠方に舌をはき、
ますます澄んでゆく高さを追って鎌首をもたげる——
あせるあまりまっすぐに身をたてる蛇。
この烽火を自分の前にわたしはあげたのだ。

わたしの魂こそこの焔、
貧欲に遠方をもとめ
うえへうえへと音もなく焔は身をのばす。
人間と動物の前からツァラトゥストラはなぜ身を隠したのであったか。
堅固な大地からなぜすっと逃がれたのであったか。
六つの孤独はすでに知っている——、
海でさえ十分に孤独とはいえなかった、
島に上陸することができて、山頂でツァラトゥストラは焔となったのだ、
いまさぐりながら第七の孤独を求めて頭上はるかに釣針をなげる。
漂流する船人よ。古い星の破片よ。
おまえたち未来の海よ。きわめがたい天よ。
すべての孤独にむかって、いま、わたしは釣針をなげる。
焔のいらだちにこたえてくれ、
高い山の頂にたつわたしのために、この漁師のために、
わたしの第七の最後の孤独をとらえてくれ——

日は沈む

一

おまえの渇きもあともうわずかだ、
　心よ、焼けただれてしまったな。
約束は大気のなかに漂っている、
見知らぬ人々の口が私に伝えてくれる
　――すばらしい涼しさがやってくると・・・
私の太陽が、真昼、頭のうえで熱く燃えていた。
うれしいではないか、きみたちが来てくれるとは
　不意の風が
涼しい午後の霊であるきみたちが。

風が変り、澄んできた。
夜は私を
　流し目で
そっと誘いかけているのか・・・

負けるなよ、私の勇敢な心。
どうして、と尋ねるな。——

二

わが生きてあるこの日、
日は沈む。
はやくも潮はなめらかに満ちて
金色にかがやく。
あたたかく息づく岩、
　真昼、おそらくそのうえで、
幸せが昼寝をしていたのだろうか。
　みどり色の光のなかで
蔦色の断崖は幸せをなおも奏であげている。

わが生きてあるこの日、
夕べは近い。
炎と燃えたおまえの目ははやくも
　なかば曇り、

おまえの涙ははやくも
　露とあふれ、
白い海をはやくも
おまえの愛の深紅が静かにはしっていく、
最後のためらいがちの無上の幸せが・・・

三

透明さよ、金色の透明さよ、来い。
　おまえは、死の
このうえなく秘めやかな、このうえなくあまい前触れ。
――自分の道をあまりにも速く駆けぬけてしまったのか。
足の疲れたいまようやくに、
　おまえのまなざしが私をとらえ、
　おまえの幸せが私に追いつく。

あたりにはただ波と戯れが。
　そのむかし重かったものは、
青い忘却に沈み、

意味もなく、いま、私の小舟は浮ぶ。
嵐、航海――小舟はそれも忘れてしまった。
希望も期待もおぼれてきえ、
心と海に波ひとつない。

第七の孤独。
感じたことはなかった、
これほど近くそのあまい確かさを、
これほど暖かく太陽のまなざしを。
――私の山頂の氷はまだ夕陽に燃えているだろうか。
銀色に、かるやかに、一匹の魚が
私の小舟がいまでてゆく・・・

アリアドネの嘆き

どなたがわたくしを暖め、今もなお愛してくださるのでしょうか。
熱い両の手を。
心を暖める埋火をお与えくださいますように。

打ち伏し、おののき、
足を暖めてもらう半死の者のように、
これまでにうかがったこともない熱病に、ああ、さいなまれ、
突き刺す氷の矢の先に震え、
　思想、というあなたに狩りたてられ。
名づけがたき方、お身を隠された方、恐ろしい方。
　雲の隠におられる狩人のあなた。
あなたの稲妻に打ち倒され、
闇からわたくしを見つめている嘲けりの目であられるあなた、
　こうしてわたくしは横たわり、
身をたわめ、くるめ、苦しみ、
ありとある永遠の拷問の責め具の、
　まととされたのです、
限りなく残酷な狩人、あなたによって、
あなたは知られざる――神・・・

もっと深く射てください。
もう一度射てください。
この心臓を突き刺し、突き破ってください。

穂先の鈍い矢での
拷問とはいったいなぜなのでしょうか。
人間の苦悩に倦きもなさらず
不幸を楽しまれる神々の稲妻の目で、
なぜにあなたはふたたび見つめられるのですか。
殺そうとはなさらず、
ただ責めて、責めるのですか。
なんのために――このわたくしを責められるのですか。
人の不幸を楽しまれる知られざる神のあなたは。

そうですか。
忍んで来られるのですね
このような真夜中に・・・
なにをお望みなのです。
おっしゃってください。
あなたは無理矢理お入りになり、わたくしに迫まろうとなさる、
ああ、すでに近すぎます。
わたくしの息づかいを聞かれ
わたくしの心臓の鼓動を感じ取られておられる、

あなたは嫉妬深いお方、
——でもなにに嫉妬しておられるのです。
お帰りください。お帰りを。
梯子はなんのために、
なかに入ろうとなさるのですか、
心のなかに、梯子を使ってお入りになるおつもり、
心の奥の秘めやかな
わたくしの思想のなかに。
恥しらずのお方。知られざるお方、悪いお方。
なにを盗もうとなさるのです、
なにを聞きだそうとなさるのです。
なにを責め取ろうとなさるのです。
拷問をかける方のあなたは、
絞り首の刑をくだす方、神——のあなたは。
あるいは、犬のように
あなたの前でころげまわれとおっしゃるのでしょうか。
身を捧げ、われを捨てて夢中となり
あなたに愛を——尾を振れと。
無駄なことですわ。

刺しつづけたらよろしい。
限りなく残酷な棘。
犬ではありません――あなたの獲物にしかすぎないわたくしです、
限りなく残酷な狩人、
わたくしはあなたの囚われ人のなかで最も気位いは高いものですが、
雲の隠の強盗のあなた・・・
さあ、おっしゃってください。
電光に隠れたお方、知られざるお方、おっしゃってください。
なにをお望みなのです、追剝でいらっしゃるあなたは――このわたくしから・・・

えっ。
身代金のですって。
そのお金でなにをなさるおつもりです。
たくさん要求なさい――わたくしの誇りはそうすすめます、
そしてくどくどとおっしゃらず――別の誇りがそうおすすめします。

そうですか。
わたくしを――あなたはお望みなのですか、わたくしを、
わたくしを――すべて・・・

そうですか。
そこでわたくしを責めるのですね、愚かにもあなたは、
わたくしの誇りを責め砕こうとなさるのですね。
愛をあなたはお与えください——どなたがわたくしを今もなお暖め、
　どなたが今もなおわたくしを愛してくださるというのでしょうか。
あなたの熱い両の手を
心を暖める埋火を
わたくしに、最も孤独なものに、あなたはお与えください、
あなたの氷が、ああ、七重の氷が
敵そのものを恋い慕えとわたくしに教えたのです。
お与えください、それどころかお委ねください、
残酷なこのうえないお方、
わたくしに——あなたを・・・

帰っていかれる。
もうあの方はお逃げになってしまわれた、
わたくしのただおひとりの仲間、
わたくしの知られざる方

わたくしの首をくくられる方――神・・・
いけません。
もどって来てください。
あなたの責め具をすべてお持ちになって。
わたくしの涙はすべて川となってあなたに流れ
わたくしの最後の心の炎は
あなたにむかって燃えあがるのです。
ああ、お戻りください、
わたくしの知られざる神、わたくしの苦痛よ。
　わたくしの最後の幸せよ・・・

稲光一閃。ディオニュソスはエメラルドの美しさのなかに姿をあらわす。

ディオニュソス

賢明でありなさい、アリアドネ・・・
おまえの耳は小さい、その耳は私の耳だ。
賢明なる言葉をひとつそこに収めるがよい。――
まずはおたがいを憎悪する、そうではないか、おたがいを愛するにいたる運命であっても。

私はおまえの迷宮である・・・

名声と永遠

一

すでにどれほどおまえは坐っているというのか
　おまえの不運の上に。
心せよ、まだわたしのために抱えているのだから
　卵を、
　ひと睨みで人を殺すバジリスクの卵を
おまえの長い苦悩のゆえに。

ツァラトゥストラはなぜ忍んで山を歩くのか——
疑り深く、心は爛れ、憂鬱なのである、
長く待ち伏せている者は——、
だが、突然、稲妻が
明るい、恐ろしい一撃がはしる

天に向かって深淵から。
――山の臓腑が
震慴する・・・

憎悪と電光がひとつに、
呪詛となったところ――、
山上にいまツァラトゥストラの怒りが棲まい、
雷雲となってツァラトゥストラは忍び歩く。
どんなものでも身を隠すものを持っている者は、もぐり込め。
床のなかへ、甘やかされたおまえたちと一緒に。
いま雷鳴が天空にとどろき、
いまおよそ梁という梁、壁という壁は震えおののき、
いま閃光と硫黄の色をおびた真理がつきぬける――
　ツァラトゥストラが呪っている・・・

二

貨幣という代物、
世界のどこでも使われる、

名声――、
この代物をつかむとき、俺は手袋をはめ、
踏んづけてみれば反吐がでる。

こいつを支払ってもらいたがっているのは誰だ。
買収できる奴らさ・・・
金で動く奴は
脂ぎった手をつきだす
このどこでも使えるブリキの音をたてる名声に。

――おまえはあんな連中を買収したいのか、
連中はみんな買収できる。
しかし、大金を叩くんだな、
財布をいっぱいにしてじゃらじゃら鳴せよ。
――さもないと、つけあがらせてしまう、
さもないと、奴らの徳とやらをつけあがらせてしまうのだ・・・

連中はみんな徳にあふれている。
名声と徳――こいつは調子がいい。

この世のあるかぎり
いつ果てるともない徳のおしゃべりの報酬は
名声―ブリキのたてる音――、
世の中はこんな雑音でもっているわけだ・・・

徳をお持ちなら、どんな方の前でも
　俺は罪ある者でたくさんだ、
あらゆる大罪を負う者といわれたい。
名声の拡声器の前にでれば、それがどんなものでも、
俺の野心なぞ蛆虫だ――、
こんな拡声器のもとなら、
最低の人間になりたいものだ・・・

貨幣という代物、
世界のどこでも使われる、
名声――、
この代物をつかむとき、俺は手袋をはめ、
踏んづけてみれば反吐がでる。

三

静かに――
偉大なことについては――私は偉大なことを見ているだが――
人は黙すべきであり
さもなくば偉大に語らなくてはならぬ。
偉大に語るがよい――惚れ惚れするわが叡知。

上を見上げる――
そこには波うつ光の海、
――ああ、夜、ああ、沈黙、ああ、ざわめきは死のように静まりかえった・・・

しるしが見える――、
はるかに遠い彼方から
ゆっくりと火の粉のように星座が私にむかって沈んでくる・・・

四

存在のもっとも高き星座。

碑に刻まれた永遠の証。
おまえは私のところへ来るのか——
誰ひとり見たことのないもの、
おまえの沈黙の美しさ、——
どうしてであろう、その美しさが私の視線から逃れていかない。

必然の盾。
碑に刻まれた永遠の証、
——しかしながらおまえは確かに知っている、
すべての者が憎悪しているもの、
私だけが愛しているもの、
それはおまえが永遠であること、
それはおまえが必然であること。
私の愛は必然であることによってのみ
永遠に燃えあがる。

必然の盾。
存在のもっとも高き星座。
——そこにはいかなる希望もとどかず、

それをいかなる否定も汚さず、
永遠なる存在の肯定、
永遠に私はおまえの肯定である、
なぜなら私はおまえを愛する、ああ、永遠を。――――

最も豊かなる者の貧しさについて

十年がすぎた――、
一滴の水もわたくしには届かなかった、
うるおいをふくむ風も、愛の露も
――雨のない土地であった。・・・
今はわたくしの叡知にこの不毛の地で
吝嗇にならぬよう願っている、
みずから溢れでて、みずから露をそそぎ
みずから黄変した荒野の雨であれと。
かつて雲に命じたものであった
わたくしの山から去るようにと、――

かつて「もっと光を、なんじら曇れる者」と言った。
今日は来てくれるようにと雲に誘いをかける、
おまえたちの乳房でわたくしをつつみ暗くしてくれと、
――おまえたちの乳をしぼりたい、
高地の牛たちよ。
乳のぬくもりを持つ叡知を、愛のあまい露を
この地に注ぐのはわたくしである。

行け、行け、おまえたち、真理たち、
陰険な目つきをしているものたち。
わたくしの山の上では
苦虫をつぶした苛立つ真理は見たくもない。
微笑で金色にそまり
太陽で甘くなり、愛でこんがりとなり、
真理はわたくしして近づくがよい、――
熟した真理をその木からもぎ取るのはわたくしだけなのだから。

今日は偶然の波うつ髪にさそわれ
手をさしのべる、

賢明になった、偶然を
おさな子のように連れ、思いのままにできるほどに。
今日はわたくは訪れるものにやさしくあろう、
歓迎されざるものにも、
運命そのものにも棘々しくするのはよそう
――ツァラトゥストラは針ねずみではないのだから。

わが心は
その舌で飽くことをしらず、
よきこと、悪しきこと、ことごとく味わいつくし、
それぞれの深みに沈んだものである。
だがいつもコルクと同じように、
いつもふたたび浮き上り、
聖なる油のように褐色の海面に輝くのであった。
この心ゆえ人はわたくしを幸せ者とよぶ。

わたくしの父と母とは誰であろうか。
父は充溢の王子か
母は静かなる笑いであろうか

この二人の結びつきが生み出したのではなかったか、
わたくしという謎の獣を、
わたくしという光の怪物を、
わたくしというすべての叡知を浪費するツァラトゥストラを。

今日は優しさに病んで、
氷をとかす春の風、
ツァラトゥストラは待ちながら待ちながら山の上に坐る、——
おのれの樹液のなかで
甘くなり、熟し、
自分の頂きのしたで、
自分の氷のしたで、
疲れながらも幸せに
おのれの創造の七日目に休む創造者として。

——静かに。
真理がわたくしの頭の上を
雲のようにただよっている、——
目に見えない稲妻でわたくしは真理を射る。

幅広の、ゆるやかな階段を
その幸せがわたくしのところへ降りてくる、
来てくれ、来てくれ、いとしい真理よ。

――静かに。
わたくしの真理なのだ、それは。
目はためらいながら、
震えは天鵞絨にゆれながら
真理のまなざしがわたくしを射る、
可愛らしく、意地悪く、少女の瞳のように・・・
わたくしの幸せの内奥をみぬき
わたくしをみぬき――ああ、そのまなざしはなにをたくらむのか――
竜がいっぴきとぐろを深紅にまいている、
少女の瞳の深みのなかに。

――静かに。わたくしの真理が口をひらく――

哀れですね、ツァラトゥストラ。
あなたは黄金をのみこんでしまった、

そのような人ですね、
やはりおなかを引き裂かれるでしょう・・・
豊かすぎます、あなたは、
多くの人をだめにした人。
あまりに多くの人を嫉妬にかりたて、
あまりに多くの人を哀れにする・・・
わたくしにすらあなたの光は影を投げる——、
おお寒い、出て行ってください、豊かな人、
出て行ってくださいな、ツァラトゥストラ、あなたの太陽から・・・

与えたい、あなたの充溢を与えてやりたいと思っている、
しかしあなた自身はありあまりすぎている人。
賢明でありなさい、豊かな人。
まずあなたそのものをあげてしまうことです、ああ、ツァラトゥストラ。

十年がすぎ——、
そして一滴の水もあなたには届かなかったのですか。
うるおいをふくむ風も、愛の露の一滴も。
でもだれがあなたを愛するでしょうか、

豊かすぎる人。
あなたの幸せはあたりをからからにして、
愛を貧しくしてしまうのです
——雨のない国に・・・

誰ひとりもうあなたに感謝しない、
あなたから奪いとる人に、
それにもかかわらずあなたは感謝する、
いかにもあなたらしい、
あなたは豊かすぎる人
あなたは豊かな人々のなかで最も貧しい人。

あなたは自分を犠牲にし、あなたを自分の豊かさが苦しめる——、
自分を放棄し、
自分をいたわらず、愛することもない、
大いなる苦悩はあなたをかた時も休ませようとはしない、
あふれた穀倉の、あふれた心の苦悩——
だが誰ひとりとしてもうあなたに感謝することはない・・・
あなたはもっと貧しくならなければ、

かしこくも愚かな人、
愛されたかったらなおのこと。
悩んでいる人だけが愛され、
飢えている人だけが愛されるのです、
まずあなたそのものをあたえてしまいなさい、ああ、ツァラトゥストラ。

――わたくしはあなたの真理なのですよ・・・

訳者あとがき

„Dionysos-Dithyramben“はすでに何種類もの翻訳がなされている。ここにまたひとつの訳を加える。私として、今精一杯の力を傾けたつもりである。

ニーチェ研究の第一人者でおられる朝日英夫先生の翻訳、そして詩人でもあられる生野幸吉先生の翻訳をたえず手元におき、さらにP. Grundlehnerの英訳を対比しつつ、自分のニーチェ理解と詩語をあつかう自分の力を賭しつつ翻訳をすすめたつもりである。あまり多くの参照も自分なりの訳を試みるには問題があろうと思い、あえてこの三書に参照はとどめた。

誤訳との批判を受けるであろうことも覚悟の上で思い切った訳を訳みたものもある。たとへば‚Unter Töchtern der Wüste‘の最後

Vergiss nicht, Mensch, den Wollust ausgeloht: におけるauslohen意味を:(tr) den Mantel oder die Form, worin ein Stück gegossen werden soll, mit angezündeten Reifern ausflammen oder ausbrennen, reinigen (D. Sanders Wörterbuch der Deutschen Sprache 1876) をもとにした。

「人よ、情欲は燃えつきた」(朝日訳)

「快楽に燃えあがる人間」(生野訳)

「快楽によって浄化された人間よ」(拙訳)

この三つの相違は歴然としている。残念ながらP. Grrundlehnerの英訳にはこの部分はない。

‚Klage der Ariadne‘においては、アリアドネはクレタ王ミノスの娘であることを念頭に上品な女性の日本語にしてみようと試みた。成功したかどうかは分らないのであるが。

‚Ruhm und Ewigkeit‘におけるEwiger Bildwerke Tafelは完全に翻訳不可能と思わざるをえなかった。

Tafel はモーセの律法を刻む、あの石板を念頭に置いているものだが、このような極めて重要な意味と歴史を背負ったこの語に相当するものは日本語にはない。

「永遠の造形の刻み板よ！」（朝日訳）

「永遠の彫像をつらねた板よ！」（生野訳）

「碑に刻まれた永遠の証」（拙訳）

と対比しつつ、私の解釈を加えての訳も試みた。

原稿の〆切りがせまった今になって朝日訳、生野訳、P. Grundlehner との対比ぐらいはせめて訳注としてほどこすべきであったと思い至った。後日、さらに幾種類かの翻訳と対比しつつ、訳注の部を加えてみたいと思う。

末筆ながらたえず参照させていただいた朝日英夫先生、生野幸吉先生に心からの御礼を申しあげるしだいです。

テキスト：Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe VI₃. hrg von G. Colli und M. Montinari, W. de Gruyter, Berlin 1969

参考文献　『ニーチェ全集』秋山英夫・富山近雄訳　人文書院　昭和四十七年

『ニーチェ全集第二期第四巻』白木社　一九八七年

P. Grundlehner: The poetry of Friedrich Nietzsche, Oxford University, New York, 1986

『イメージ・シンボル事典』アト・ド・フリース著　山下圭一郎他訳　大修館書店　一九八四年

Die Bibel oder die ganze Heilige Schrift des alten und neuen Testaments der Übersetzung Martin Luthers, Württembergische Bibelanstalt, Stuttgart, 1973

『旧新約聖書（文語聖書）』日本聖書協会　一九八一年

『新約聖書』（一九五四年改訳）日本聖書協会　一九五八年